

那覇クルーズターミナル整備事業について

那覇港管理組合 企画建設部 建設課 ○主任技師 小川 顕

1. 那覇港の歴史

沖縄県における物流・人流の中心である那覇港は、15世紀に尚巴志(しょうはっし)によって琉球の三山を統一したのを機に日本、中国、朝鮮及び東南アジアとの交易が盛んになり発展してきました。泊港は王府の国港として整備され、外国との通商が始められています。泊港は琉球国第一の港となり諸外国の船が錨をおろしました。

2. 那覇港周辺のゾーニング

ウォーターフロントエリアを有機的に連結し、大交易時代を築き上げた琉球王国時代のみなとまちのように、人々が集い、活気に満ち、ロマンあふれる交流の場として、拠点ごとに魅力ある空間づくりを行うことを目的としゾーン設定を行っています。本施設は、外国客船の寄港の場所として、人と文化が交流を行うゾーンとなっております。

3. 整備概要

那覇クルーズターミナルビルは鉄骨造2階建延べ面積4468.27㎡となっております。2階はクルーズ船来港時に出入国審査及び動物検疫、植物検疫、税関審査の各審査業務を行うエリアとなっており、1階はエントランスホール、インフォメーションとなっております。屋上部分は、クルーズ船からの見下せることから、歓迎セレモニーを行える空間となっています。

クルーズ船が寄港しない場合の2階部分は、C I Q審査家具を移動し、各種イベント、展示会、集会、発表会等多目的に使えるホールとして一般開放します。1階ピロティ空間や周辺空間（バース）とも連動し海上イベント・マリンスポーツの観覧席、夜間には花火大会の観覧等、施設全体が利用できます。

4. 事業成果

那覇港泊ふ頭の水際線は、臨港道路那覇空港線(うみそらトンネル)と背後地(市街地)が一体となった外国客船の寄港の場所として、人や文化の交流拠点としての賑わいを魅せています。2012年には67回の寄港があり延べ7万人のお客様が那覇港を訪れました。那覇クルーズターミナル完成によって、本年は過去最高の88回の寄港を予定しております。

5. 今後の課題

那覇港は当面、観光型寄港地として実績を積み上げながら中長期的には国内外のフライ&クルーズを考えています。現在の那覇港湾施設は、クルーズ専用バースはひとつしかありません。よって、クルーズ船が那覇港に2隻入港した場合、一隻については那覇新港ふ頭の貨物バースに接岸している状況です。さらに貨物バースに接岸したクルーズ船周辺では、貨物と人が混在する状況を早急に改善することが課題となっています。

今後は、拠点港を視野に入れ、近隣アジア諸国のクルーズのホームポート(母港)となれるよう、種々の対策を講じ、より一層の経済効果を生み出せるよう努力していきたいと考えております。